

乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ

砂 賀 道 子,¹ 二 渡 玉 江²

要 旨

【目 的】 二期的乳房再建を決意した乳がん体験者の、がん罹患から現在までの自己概念の変化のプロセスと再建の意味づけを明らかにする。【対象と方法】 乳房切除術後再建を行った A 氏と、温存術を施行し 2ヵ月後に再建術を決定した B 氏を対象とし、ライフストーリー研究を参考に質的記述的に分析した。【結 果】 自己概念の変化の類似性から抽出されたテーマは、「1. 乳がんであることを人には言えない」「2. 乳房喪失・変形へのコンプレックスと生命の優先との間で揺れ動く」「3. 乳房再建への期待」「4. 乳房再建によって取り戻した自分らしい生き方・自信の回復」であった。【結 語】 乳房再建術はボディイメージを高め、女性としての新しい価値観を獲得していくための手段として有用である。自己概念の変化のプロセスに沿って体験者の価値観の揺らぎや様々な思いを表出させ、その人に合った情報提供を行い、自己価値観を高めていくことの重要性が示唆された。(Kitakanto Med J 2008 ; 58 : 377~386)

キーワード：乳がん体験者, 乳房再建, 自己概念, 意味づけ

はじめに

近年の乳がんに対する集学的治療の進歩は著しいが、その治療の第 1 選択は現在も手術療法である。中でも乳房温存術が主流であるが、温存・切除といった術式の差異に関わらず、温存であっても乳房の変形は避けがたく、変形や喪失によるボディイメージへの影響は大きい。乳がんの手術は、単に乳房を切除するという身体的な変化だけではなく、心理・社会的にも大きな変化をもたらす。女性としての自己の価値観や、生きる意味さえも変化させざるを得ない状況を作り出す。そのような状況の中で、Taylor¹ は乳房再建術が患者の身体的・心理社会的な状態、および精神的健康を取り戻すのに役立つ、再建術を行った患者は、より良く適応していると述べている。このことは、乳房再建が乳がん体験者に女性としての自信を取り戻し、肯定的な自己概念の形成を促し、長期にわたる療養生活を送る上での大きな支えとなることを示している。

乳房再建法には、一期再建と二期再建があり、一期再建では手術が一度で済むこと、喪失感を味合わなくて済むことなど患者側にはメリットが多いが、再発・転移を

危惧して一期再建を積極的に勧める外科医は少ない。人工物を用いた再建は自費診療となるために、治療費などの経済的な側面や、局所再発診断の遅れにつながるのではないかという不安もあり、再建の選択には多くの困難が伴う。本邦では再建術が行える施設は限られており、標準的な治療とは考えられていないため、その体験者は多くはない。

しかし、乳がんは女性のがん罹患率第 1 位であり若年者の罹患も少なくないため、術後の QOL 向上のためにも乳房再建に対する期待・需要は高まると考えられる。そのため、再建を行う乳がんサバイバーの体験や、それに伴う身体的・心理社会的な変化のプロセスなどの研究の蓄積が必要である。

乳房再建に関する看護研究は、乳房再建患者の喪失体験と再建前後のボディイメージの変容について分析したもの²、一期再建を行った患者の思いを明らかにし、具体的イメージにつながる再建についての情報提供や、専門的に関わる看護職の必要性を示唆したもの³がある。他には乳房切除患者のボディイメージの変容に関する研究の中で、再建患者の QOL 向上についてわずかに言及されている程度であり、極めて少ない。

1 群馬県前橋市昭和町3-39-22 群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程 2 群馬県前橋市昭和町3-39-22 群馬大学医学部保健学科
平成20年8月12日 受付
論文別刷請求先 〒371-8511 群馬県前橋市昭和町3-39-22 群馬大学医学部保健学科 二渡玉江

また、乳がん体験者の自己概念に関しては、胸筋温存乳房切除術を行った患者の入院から術後3ヶ月までの自己概念の変化と、それに即した看護支援のあり方についての研究⁴、放射線療法を受けている慢性期がん患者の自尊感情や健康統制観、情緒的サポートの関連検証研究⁵、乳房切除術を受けた患者の性に関連する意識と自己概念との関連についての研究⁶などがあるが、乳房再建と自己概念を関連づけている研究は見あたらない。がん体験者は病気とともに生きる生活を送る中で、様々な苦悩を乗り越えられるような病気の意味づけを行う⁷と言われるように、乳がん体験者も現実と向き合いながら、がんと共に生きていくために自己の価値観を変化させ、適応に向けて自己の体験を意味づけていくのではないかと考える。乳房再建が自己概念の変化とどのように関連し、意味づけられていくのかを知ることは、乳がん体験者を支援していくために必要である。

そこで本研究の目的は、術後4年が経過し、再建を望んで乳房切除した体験者と、温存をしたのちに再建しようとしている体験者2名の、がん罹患から現在までの自己概念の変化を、個人の生活史上で体験した出来事や、その経験についての語りから分析するというライフストーリーの手法⁸を参考に分析し、乳がん体験者の自己概念の変化のプロセスと乳房再建との意味づけを明らかにすることである。

研究方法

1. 研究デザイン

ライフストーリー研究を参考にした質的記述的研究デザインである。

2. 用語の定義

1) ライフストーリー研究

ライフストーリー研究とは、人間が生きている人生の物語・生の物語・いのちの物語・生活の物語を「語り」をもとに研究する学問である。ライフストーリー、つまり人生を物語るということは、その人が生きている経験を有機的に組織し意味づける行為である。ライフストーリーは、広義でのナラティブ・アプローチに基づき、「語り」そのものに関心を持ち、どのように人生経験が構成されているか、どのように意味づけられているかを中心に分析するものである⁹。また、人が人生を生きていくときの生成・変化のプロセスをより重視するものであることから、自己の価値観や生きる意味を変化させながら、乳房再建を決意する乳がん体験者の思いを描くのに適していると考えた。

2) 自己概念

自分自身について抱く信念や感情の合わさったもので

あり、自己の特性や自己の可能性、価値、真価などに対する各自の評価である。それは自分に対する感覚と経験によって形成され、変化していくものであり、これが自己の行動を導いていくものである¹⁰。

3) 意味づけ

体験した出来事を解釈・対処し自己の内部で普遍化していくこと¹¹である。

3. 対象者

乳がんと診断され再建術を前提に胸筋温存乳房切除術施行後2年程度で二期再建を行い、調査時に最初の手術から4年以上が経過したA氏と、乳腺全摘出術を行ってから4年以上が経過し、2ヵ月後に二期再建を決定したB氏の2名である。

4. 調査方法

1) 同意を得るまでの手順

外来受診時に担当医より研究の協力についての意向を確認していただき、協力への意思があると確認できた対象者に、研究者が文書および口頭で研究の説明を行い、文書で同意を得た。

2) データ収集

- (1) 期間：平成20年4月から6月
- (2) 場所：C病院乳腺外科外来
- (3) 方法：①面接調査：インタビューガイドに基づく半構成的面接を行い、対象者に許可を得てICレコーダーに面接内容を録音した。
②診療録調査：基本的属性、疾患および治療経過に関する情報などについて、対象者に許可を得て行った。

5. 分析方法

半構成的面接によって得られたデータから逐語録を作成し、対象者ごとに診断から現在までの体験を時系列で整理した。ライフストーリーとしての視点から、どのように診断から現在までの体験が構成されているか、再建との関連をどのように意味づけているかを中心に語られた内容を分析した。以下に分析の手順を示す。

- 手順1：乳房再建に伴う思い、自己の価値観の変化に関連した文脈を抜き出す
- 手順2：意味内容に沿って一文として表現する
- 手順3：類似したものを集めてテーマを表す
- 手順4：再建との意味づけを解釈する

6. 分析の信頼性・妥当性

分析・解釈の全過程において、がん看護研究者1名のスーパーバイズを受け、検討を重ねながらその信頼性・

表1 対象者の概要

	A氏	B氏
年齢	40歳代半ば	40歳代半ば
ステージ	stage II A	stage I
術式	胸筋温存乳房切除術	乳腺全摘出術
術後経過年数	4年+X月	4年+X月
再建した時期	術後2年程度	(面接時より2ヵ月後に予定)
術後補助療法	ホルモン療法	なし
家族構成	夫	夫と3人の子供
職業	専業主婦	会社員

表2 分析過程の一例

	手順1：乳房再建に伴う思い、自己の価値観の変化に関連した文脈を抜き出す	手順2：意味内容に沿って簡潔に表現する	手順3：類似したものを集めてテーマを表す	手順4：再建との意味づけを解釈する
1	A氏：乳がん…って、人に、言いたくない病気ですね。最初の3年間はまったく人に隠してました。本当に信頼できるお友達、本当、一人か二人だけ、あと家族だけ、あとはまったく知らないから…(中略)。なんでなんだろう？やっぱり、コンプレックスを感じてたのかな？ B氏：みんな、その病気のこと知らないから、出張先でもどこでも、みんな押さえてくれる先が、温泉であったり、もうBさん来るんだからって、やってくれるんですけど、入れない自分がいて…で、ありがとう！って言うんだけど、本当のことは言えない！っていう、矛盾があるので…	乳がんは人には言いたくない、隠しておきたい病気 まわりの気遣いはありがたいけれど、本当のことは言えない	乳がんであることを人には言えない 喪失や変化を補う最善の方法として乳房再建に期待する	乳房再建は女性としての価値観を取り戻すという意味づけがある。 自分のこうあるべき、こうありたいという自己理想・自己期待を満たすための手段としての意味づけがある。
3	A氏：まず、そのまっ平らな(胸の)ままでは…あの、考えられなかったですよ、40歳？40ちょっとで、まだ、やっぱり…うん(一言一言噛みしめるように)…(中略)こんなに長く生きられるんだと思ったときに、やっぱり、そう、女のはきれいに、いたほうがいい！がんになっちゃったんだから、これ仕方ないやって、いう考えはいけない B氏：きちんとすること(再建をする)で、もっと、こう、アクティブに生きられるっていうかな？そういったところが…うーん、最近…、私もしてみても、そう感じられるようになっていきたいなと思います	がんになっても女性としての美しさを持っている 再建することで、一人の人間としてさらに活動的に生きていきたい	喪失や変化を補う最善の方法として乳房再建に期待する	乳房喪失・変形による否定的な感情や自己の価値観を変更・修正することが出来ると意味づけることは、これからの人生に希望を見出し、前向きに生きていこうとする意欲を高める

妥当性確保に努めた。

7. 倫理的配慮

本研究はC病院の倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象者には、個人のプライバシーの保護、本研究から生じる個人への不利益、自由意志による参加、情報の公開、研究の成果発表、資料の保管・廃棄方法などについて文書および口頭にて説明し、署名にて同意を得た。

結 果

面接は各対象者に1回実施し、面接時間はA氏61分、B氏55分であった。対象者の概要は表1に示した。自己概念の変化に関連した文脈を抜き出し、意味内容に沿って表したテーマは、『乳がんであることを人には言えない』、『がん治療としての手術と乳房喪失・変形へのコンプレックスとの間で揺れ動く』、『乳房再建への期待』、『乳房再建によって取り戻した自分らしい生き方・自信の獲得』の4つであった。

まず、結果を導いた分析過程の一例を表2に示した。

以下、乳房再建に関連した自己概念の変化のストーリーを4つのテーマに沿って記述した。対象者の語りを《 》の後に、研究者の質問は〈 〉内に、読み手にわかりにくいと思われる箇所・補足は()内に記載した。

1. 乳がんであることを人には言えない

A氏：乳房切除をしたA氏は、乳がん罹患したことを本当に信頼できる友人以外には話さなかった。もし、乳がんでなかったら言えたのか、乳がんには特別な意味があるのか、自分にもはっきりとはわからないが、その根底にあるのはコンプレックスであるかもしれないと思っている。

《A氏の語り》

あの…やっぱり、乳がん…って、人に、言いたくない病気ですね。最初の3年間はまったく人に隠してました。本当に信頼できるお友達、本当、一人か二人だけ、あと家族だけ、あとはまったく知らないから…(中略)。なんでなんだろう？やっぱり、コンプレックスを感じていたのかな？…よくわからないけど、とにかく、言いたくなかったですね。これ、たとえば、違うがん(乳がんでなかったら)だったらどうだったんだろう？でもね、なんていうんだろう、心の中でね、あの人ががんなんだって！そういうと、先がないのかな？って、そういう風に思われるのがしゃくだったのかな？

B氏：B氏は温存であるが、手術して4年たっても温泉には入れない。乳がんであることを、妊娠・出産というイベントに隠れてしまったため、職場の人には話さないで

済んだが、そのことが今になってみると本当のことを話すことが出来ない理由になっている。

《B氏の語り》

みんな、その病気のこと知らないから、出張などで宿泊先として押さえてくれているのが、温泉であったり。Bさん来るんだからって、言ってくれるんですけど、入れない自分がいて…。で、“ありがとう！”って言うんだけど、本当のことは言えない！っていう、矛盾があるので…。

2. がん治療としての手術と乳房喪失・変形へのコンプレックスとの間で揺れ動く

A氏：最初から、再建を前提に乳房切除術を選択したA氏。しかし、思った以上に乳房の喪失感強く、夫婦喧嘩をしたり夫に当り散らしたりして、夫婦としてやっていけなくなると思うくらい、精神的に追い込まれた時期もあった。

《A氏の語り》

思っていた以上に、コンプレックスがあったんですね。喪失感っていう風に本には書いてありますよね？よくね。でも、私は絶対にならない、そんなことよりも、治療して、絶対に再発しないで、まず、がん取っちゃったほうがいいんだっていう風に思っていたから…。でも、でもね、再建するってわかっていても、いろんなことがすごく(間)…大変だったのね(涙ぐむ様子。言葉に詰まる感じで途切れ途切りに話す)。あのとき(手術のとき)は早くって、あの…しないと、もうどんどん大きくなっちゃうんじゃないのかな、がんがとか(笑)…そういう気持ちが強かったですね。怖かったですよね。初めて死と直面して…。とにかく、乳がんっていうのは、完治ってものがないから、何年、何十年たっても、再発の確率っていうのはあるって思っている…。特に手術後の1年間というのは、そうね、不安でしたね。すごい夫婦喧嘩もしたし、当り散らしたし、今までの生活が送れなく…なっちゃったストレスですよね？だから本当に、主人よく耐えたなって思うくらい、怒鳴ったり、“わーっ”ってわめき散らしたときもあります。

がん罹患以前は、楽しみながら自分の思うように生きてきただけに、手術をして乳房を切除することは、今までの生活が送れなくなるという思いを強めた。術前には、身辺整理をしていた様子が伺える。

今まで、専業主婦できて、あの、子供もいないんですね。だから、わりと自由な時間があって、いろんなことを楽しみながら来たのが、全部なくなっちゃうのかな

とか、いろんなこと考えちゃって、今までの生活が全部…。もう2度と着られないだろうなと思って、手術前かな？全部捨てましたね、レオタードやスポーツウェアね。それに、胸の開いたお洋服も、みんな捨てましたね、もうたぶん着ることはない…と思って。

B氏：温存術で傷も小さくて済むと思っていたが、乳腺全切除という広範な切除になったことで、再建術を決意するに至った。

《B氏の語り》

私の場合は、基本、温存でと。最初の見立ても、ちょっと切って、終わるはずだったんですけど、それが進行していたんです。(中略)私はベッドの上でもう、まな板の鯉状態でしたので、はい。それで、「進んでいますけど、どうしますか？」っていうことを、主人は聞かれ…これ以上行かないように全部取っちゃうか、あの残すかっていうことの判断は主人です。(再建をされたいということでしたが術式が手術中に決まってしまったことで、自分の思いとの間で葛藤されたことはなかったですか?) いえ、主人が温存でということ、回答を出したらしく…。先生は、その取りきれなかったときに、リスクがあるから、全摘の方が本来はリスクがないって、おっしゃったようですが…。後々きくと、再建するだろうって、私の性格を読んでいるんでしょうね？“再建するんだろうと思うし、仕事とかも復帰したいと思うので、今後の彼女の生活を考えて温存で！”って主人は言ったと…。全摘されていたら、ちょっと不安っていうか、あの、これからどう再建していくんだろうというのが、あったと思うんですけど、一応、そういう風に温存でとお願いしてしてくれたので…。

B氏は社会的立場もあり、人目も気になることから、温存にしたことに満足していた。

女性としてちょっと、あったほうがいいかなと。別に誰に見せると言うのではないですけど、でも、何かの時には、って思うので…。何ていうんだろう？(乳がんになったことに対しては、真摯に受け止めたけど、自分に置き換えてみると、なんか自分にいい方向にすべて持っていつている感じですかね。

3. 乳房再建への期待

A氏：がんの治療のためには切除するしかないと思い乳房切除術を行ったが、やはりそのままの状態ではできなかった。再建することで、女性としての自信を取り戻し、病気だからと諦めることはないのだというこ

とを、同じ乳がんの女性に伝えたいと話す。

今になってみれば、同時再建ができたらよかったという思いもある。

《A氏の語り》

〈手術するときに再建するって決めていたのですか?〉そうです。そう、まず、その、まっ平らなままでは(間)…考えられなかったですよ、40歳、40ちょっとで、まだ、やっぱり…うん、(一言一言噛みしめるように)だから、とにかく、その、再建するにはどういう手術の方法が一番いいですか?ってきいたら、切除が一番!いいっていう形で…。一番残念なことは、C病院に形成外科医がいなかったっていうこと。傷が大きいんですね、あの、外科の先生のね。もし、形成の先生と一緒に協働してやってくれたら、傷は今の技術だったら、なかったらうなとは思いますが。うん、あの、まだまだ、がんとして治療して終わりの治療ですよ?その先がないですよ?

再建のほうももっと、上手く、手術と同時に再建できれば、負担がないし、傷も少なくて…。その後、こんなに長く生きられるんだと思ったときに、やっぱり、そう、女の人はきれいにいたほうがいい!がんになっちゃったんだから、これ仕方ないやっていう考えはいけないって。それは強く、あの、強かったですね。

B氏：手術をしてから数年が経過し、子育ても一段落したときに、自分の人生を悔いなく生きるためにも、また、女性としても自信を持ちたい、もう一歩前進したいと考えるようになった。**B氏**もまた、同時再建に対する思いを語る。

《B氏の語り》

この際、お金なのか?その人生の楽しみをプラス、自分に入れていくのかって、考えるときに、ちょっと、まだ、若さも残っているし、もう一花咲かせるためには…(再建)っていう気持ちはありました。友達からも旅行に行こうって言われたり、友達はみんな知っているんだけど、やっぱりね、そういうところで、気を遣わせるのも嫌なので。じゃあ、この際もう、下の子が幼稚園に入ったし、私もある程度、女性として…っていう部分も捨てたくない…。やっぱり、見られる仕事をしているので、そういう面では、あのちょっとまた、一歩前に出られるかな?と思いますので。

でも、きちんとすることで、もっと、こう、アクティブに生きられるっていうか、そう感じられるようになりたいなと思いますけどね。私としては今生、この名前で生きる人生は1回きりなので、ま、とりあえず悔いのないものにしておきたいなっていう感じですね。

保険診療にならないのであれば、料金とかいろいろ

な面で大変なんでしょうけど、それでも1回でことが済めば、負担は少ないわけですからねえ。それは本当に思いました。

4. 乳房再建によって取り戻した自分らしい生き方・自信の獲得

A氏：再建後1年が経過し、今まで出来ていたことが再び出来るようになった、諦めていたことが出来るようになったことを実感するようになる。

《A氏の語り》

去年、再建終わって1年くらい?というか、完璧に終わってからは、そのお風呂とかも入れるようになったり。温泉行ったり、そうね、旅行に行ったりして。その、今までやってたことが出来るようになったときに…あー元に戻ったー!って思うようになりましたね。いまは自然に受け入れて、再発まだしてないし…。再建も順調に終わって、で、順調にいろいろなことがまた出来るようになって、こんなTシャツも着られるようになるなんて思わなかったものね。

がんになっても、こういう形で、きちんとケアが来て、あの、こんな快適に過ごせるんだよ!ということ…伝えてあげたいですね。乳がんになってもこういうことが…旅行に行けて、ダイビングも出来て、こんなことができるようになったんだ!って、毎回毎回思うんですよ。それは、病気になるないと、そういうありがたさっていうのは、私は生まれてこなかっただろうなって…。ひとくちにみんな、自分になってみて、その痛みがわかるっていうけど、本当にそれは痛切に、感じますね。毎回思いますね。あー、だから、普通に生活できるっていうことがまだ不思議な感じがする。〈不思議ですか?〉うん、“あーできるんだ。よかった”って思いますね。

考 察

両氏のライフストーリーの解釈を通して、自己概念の変化に対する4つのテーマが導き出された。乳房再建に伴う自己概念の変化のプロセスは、『乳がんになったことで女性としての価値が失われ、思い描いていた自己実現が果たせないのではないかという否定的な自己概念』を持つことから始まり、『病気の進行に対して最善の治療であると確信したはずの手術と、それによって大きく変化するボディイメージや喪失感との間で揺れ動く自己概念』に翻弄され、『自己概念の大きな揺らぎを体験しながらも、喪失や変化を補う方法として乳房再建に期待する』ようになり、『乳房再建によって自分らしい生き方を取り戻し、女性としての自信を回復させ、肯定的な自己概念を形成する』に至ると考えられた。

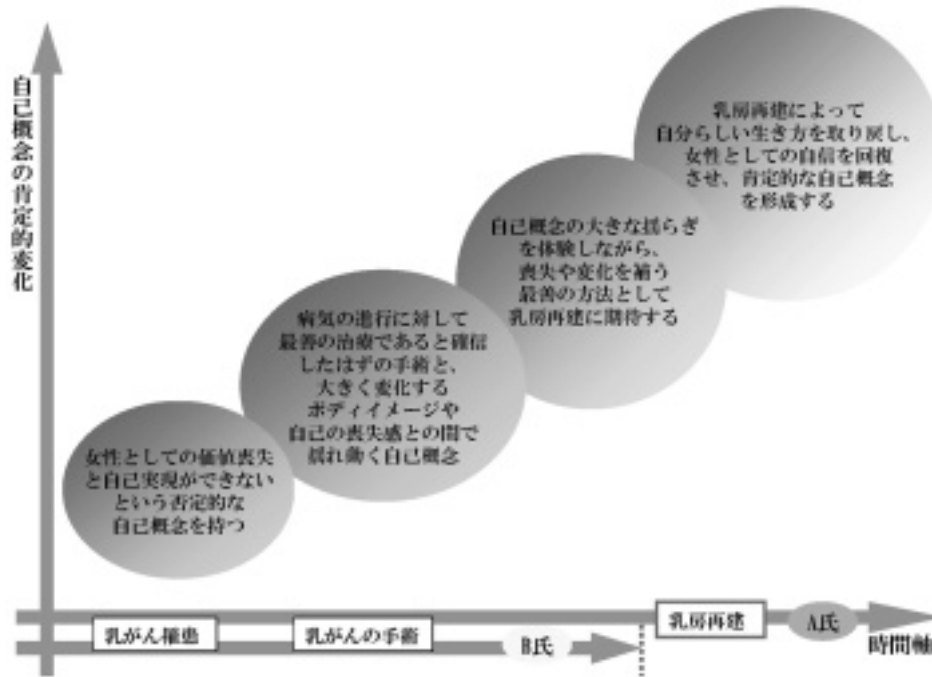


図1 自己概念の変化のプロセスと乳房再建の意味づけ

以下、自己概念の変化のプロセスと乳房再建との意味づけ(図1に示す)について考察し、看護支援への示唆を述べる。

I. 自己概念の変化のプロセスと乳房再建の意味づけ

1. 乳がんになったことで女性としての価値が失われ、思い描いていた自己実現が果たせないのではないかという否定的な自己概念を持つ

乳房切除をしたA氏は、乳がん罹患したことを本当に信頼できる友人以外には、話さなかった。「がんに罹患したということは、未来がない、死が近い、不治の病を抱えていることなどを意味すると、他者からそう思われていると感じるだけではなく、自分自身でもそう感じていた。」と語る。自己概念は、内面の知覚と他者の反応を知覚することから形成される¹⁰と言われていることから、この時点でのA氏は、自己の内部に感じていたコンプレックスと、他者からの同情や憐れみなどを予期的に感じ取り、その反応から否定的な自己概念を形成していたと考えられる。「がん患者は必要以上に他者を意識し、他者が自分をどのように見ているのかを敏感に捉える傾向にあり、自分の意図通りに自己を捉えてもらえるように多大な努力を払う⁴」と言われているが、A氏は他者から見た自己観を過剰なくらい意識していたと考えられる。

また、「これ、たとえば、違うがん(乳がんでなかったら)だったらどうだったんだろう？」という疑問を自分自身に問いかけているが、単にがんに罹患したからという思いだけではなく、乳がんだからという特別な意味があると感じていた。自己概念は身体的自己と人格的自己

に大別され、身体的自己を構成する要素としてボディイメージを位置づけている。¹⁰ 乳がんの治療の第一選択である手術は、乳がん患者に大きなボディイメージの変化をもたらす。乳房切除術後のボディイメージは、術前に乳房の存在をいかに女性としての価値に結び付けているかによって影響され、乳房の価値や重要性を高く意識している場合は、術後にうつ状態を招きやすいという報告¹²もある。乳がんであることを言えないと感じたA氏は、乳房に対する価値を高く意識していたために、手術によるボディイメージの変化を重大なものと捉え、女性としての価値観、自己概念を変化せざるを得ない状況に向き合っていたと考える。

B氏も、自分が信頼できる友人にしか話しておらず、妊娠とがん治療(手術)が同時進行だったため、職場では気づかれることなく済んだ。それは自分にとって都合の良いことであつたと思っていたが、人前が出る機会が多くなった最近では、気づかれていないがために逆に、気を遣われても本当のことが言えず、自分の中で葛藤することが多くなったと語る。社会的な立場を重視するB氏にとっては、自分自身に対してこうあるべきだという人格的自己である自己理想・自己期待の側面が、強くボディイメージに影響したのではないかと考える。

乳房再建はA氏にとっては女性としての価値観を取り戻すための、B氏にとっては、自分のこうあるべき、こうありたいという自己理想・自己期待を満たすための手段としての意味づけがあつたと解釈する。

2. 病気の進行に対して最善の治療であると確信したはずの手術と、それによって大きく変化するボディイメージや自己の喪失感との間で揺れ動く自己概念

手術体験は自己喪失の脅威や、死の恐怖を引き起こす可能性のあるものである。どの手術においても身体の変化に伴い、自己のもつボディイメージの変容を余儀なくされる。「患者はボディイメージと現実の身体構造や機能の相違を諦める努力をするとき、悲嘆の過程を経験する¹⁰⁾」と言われている。小島¹³⁾は悲嘆について「喪失に伴って起こる一連の心理過程で経験される落胆や絶望の情緒的体験である。人が喪失を乗り越え、それを受容するためには、その人自身が十分に悲しむこと、喪失による抑うつ反応によって、スイッチが入れられる悲嘆作業を十分にやり遂げることが重要である」と述べている。A氏は、温存は無理と言われ乳房切除術を決意したときの気持ちを、「治療して、絶対に再発しないで、まず、がん取っちゃったほうがいいんだ！っていう風に思っていたから…。でも、でもね、再建するってわかっていても、いろんなことがすごく大変だったのね(涙ぐむ)」と語ったように、再発を避けるためには切除することが最善であると思ひ、問題志向型の対処をしながらも、心の中では様々な葛藤があり、揺れ動いていたことが伺える。乳房切除術は、身体的喪失のみでなく、今までの生活全体を無くしてしまうような感覚、今までの生活との決別、女性らしさの喪失という心理社会的、またスピリチュアルな側面での喪失体験・悲嘆の作業をしてきたと考えられる。

B氏は温存術であったが、思っていた以上に進行していたことが術中にわかり、最初の診断よりも大きく切除することになった。基本的には温存でと言うB氏の希望通り温存ではあるが、創部は大きなものとなり、こんなはずではなかったという思いもあったと語る。

将来を考えて再建をするためには、温存でいたほうが良いと思っていたので、夫が医師から「取りきれなかったときのリスクを考えれば全摘(乳房切除術)のほうがいいでしょう。」と言われたときに、全摘(乳房切除術)ではなく温存(乳腺全摘術)という選択をしてくれた夫に感謝している。本人の同意の上ではあるが、術式の最終選択は本人ではなく夫に委ねられたことで、夫は本人に代わって周囲からの生命を優先したほうがよいのではないかという意見と、妻の温存への希望との間で揺らぎ苦悩していた。

小西ら¹⁴⁾は、乳がん患者の手術に臨む姿勢に影響を及ぼす要因について「再発に対して抱くイメージと、そこから生じる恐怖感の度合いが反映する」と述べている。A氏は再発の可能性は常にあると考え、とりあえずは生命を優先させることで納得して手術を行っている。一方、B

氏自身は、乳がんに罹患したことを真摯に受け止めたが、stage Iでもあり生命への危機感や再発よりも、ボディイメージの回復を優先したと考えられ、両氏の手術に臨む姿勢の違いには、再発に対する考え方が影響していると言える。生命を優先して選択した手術に確信をもつ反面で、その手術によって喪失するものは身体的なものばかりではなく、自己の価値観や自己概念を揺るがす大きなものである事を自覚し、自己決定した治療選択との間で揺れ動く。A氏は再建をすると決意した後でも全ての面で大変な体験をしたと語っていることから、生命と自己の喪失感の間の葛藤は、乳房再建を持ってしても容易には補えきれないものであったと解釈する。

3. 自己概念の大きな揺らぎを体験しながら、喪失や変化を補う最善の方法として乳房再建に期待する

乳房や生活そのものの喪失・変化を体験し、辛い思いを抱えながら乳がんという病気と向き合う中で、喪失・変化を補う方法として乳房再建に賭ける気持ちを強くする。A氏は乳房切除術を受けるということで、その喪失の大きさから手術前から再建を決意しているが、B氏は乳房温存術で、妊娠・出産・育児という母親役割もあり、再建については術前からその意思はあったものの、実際に再建に踏み切るには術後4年を要している。A氏は手術を受ける前から、女性として美しくありたいという自己理想を強く持っており、術後も「こんなに長く生きられるんだと思ったときに、やっぱり、そう、女の人はずいぶん、いたほうがいい！がんになっちゃったんだから、これ仕方ないやって、いう考えはいけない」と述べているように、自己の理想としてのボディイメージが、がんとともにこれから生きるための自信に繋がることを示している。B氏は「きちんとすること(再建をする)で、もっとこう、アクティブに生きられるっていうかな？」と再建をすることで、もっと積極的に生きられる、そして、もう一歩前進できるのではないかという期待を持っている。両氏のこのような思いは、ともに壮年期にあり、女性としてまた社会的存在として、人格的自己である自己理想、自己期待についての認識が高い世代であることから説明できる。

自己概念の揺らぎやその影響については、「個人の価値ある対象や特性を喪失することで、その個人の自己概念が揺らいだり、脅かされたりする。自己概念が揺らいだり脅かされたりすることにより、その人自身の自己一貫性が働き、安定した状態に戻ることが出来れば適応状態と見ることが出来る。喪失体験やそれに関連して生ずる悲嘆の過程は、感情や思考や価値付けの変更・修正であるので、自己概念の揺らぎや脅かしの問題として考える必要がある。¹⁰⁾」と言われているように、乳房再建は自己

概念の揺らぎや脅かしに対し、自己一貫性を保持するための効果的な方法でもある。乳房再建を通して、乳房喪失・変形による否定的な感情や自己の価値観を変更・修正することが出来ると意味づけることは、これからの人生に希望を見出し、前向きに生きていこうとする意欲を高めると解釈する。

4. 乳房再建によって自分らしい生き方を取り戻し、女性としての自信を回復させ、肯定的な自己概念を形成する

A氏は乳房再建後しばらくは痛みのために眠れない日々を過ごしたが、1年くらいが経過した後、今まで諦めていたことができるようになったことを実感するようになった。

上谷²らは、乳房再建による胸の膨らみがもたらす効果として、「身体的障害の改善・行動範囲の拡大・積極性・病気を忘れさせる・女性としての自信の復活」などを挙げている。また、Filiberti¹⁵らは、「乳房再建は女性らしさの新しい感覚を獲得し、自己のボディイメージの価値を高めることができる。その感覚は乳がんに打ち勝った証明でもある。乳房再建は、身体的、心理的統合をはかるだけでなく、内面の感情、幸福感までも再発見することに寄与することが出来る。」と述べている。乳房再建術が乳房切除による身体的、心理・社会的な喪失感を補完し、自己の価値観を低いレベルに置いて、否定的であった自己概念を新しい価値観のもと、肯定的な自己概念へと変化させたと考える。

B氏は乳房再建術を前にして、再建をした後に自信を持って、もう一步前進することができるようになったらいいという期待感を持っている。自己のボディイメージの価値を高め、新しい自分らしさを獲得できるという期待は、生きていく上で不可欠なものとなる。肯定的な自己概念を形成することは、術後の適応を促し、生きる力・生きる自信をもたらすと考えられる。

乳がん体験者の自己概念の変化のもつ意味は、「患者が、がん罹患の経験の中で自己否定になりながらも、現実吟味を行い、自己価値を維持し、新しい価値観を明確にしようとする点にある⁴」と言われるように、現実に対峙し新しい自己の価値観を見出すことであると考えられる。また、喪失体験から自分らしさを取り戻すことは、「悲嘆の過程を上手く完了し、手術によって生じた現実の身体の変化の上に新しいボディイメージを確立し、以前の興味や活動を取り戻す¹⁰」ことであり、A氏が語った“普通の生活”が出来るようになった時が、否定的な自己概念から肯定的な自己概念形成への変換点であったと考えられる。

以上から、乳房再建は自己価値を維持し、新しい価値

観を形成していくための有益な手段であることが意味づけられた。

II. 看護支援への示唆

自己概念の変化のプロセスを踏まえ、肯定的な自己概念形成を促進するための看護支援について述べる。

乳がん罹患したことで、自己の価値観や女性としての価値観を否定的に捉えている時期には、その感情を受け止める姿勢で関わり、自己の価値観の揺らぎや乳房喪失・変形に伴う様々な思いを表出できるよう、じっくりと話を聴く姿勢を持つことが重要である。

手術を目前にし、生命の優先と自己の価値観・ボディイメージとの間で揺れ動いている時期には、心理的な変化、動揺が誰にでもあることであり、一度決断したことであっても、手術のその時まで迷うことはよくあることであることを伝え、体験者の意思決定を尊重する姿勢で関わるのが大切である。「術前の患者は、繰り返し繰り返し考え、悩み葛藤しており、この時期が乳がん患者にとって最も辛く精神的な支えを必要とする」という鈴木¹⁶らの報告にもあるように、この時期の意思決定を支えていくことは重要である。

乳房の喪失や変形を補う方法として乳房再建を決意する乳がん体験者にとって、その期待は大きい。藁をもつかむ気持ちで過大な期待を持っていることもある。そのため、特にデメリットと考えられる再発への不安や、合併症の危険性、期待したとおりの手術が可能であるか否かなどについての具体的で正しい情報の提供は不可欠である。その体験者に合った治療選択ができるよう家族を交えて、チームで共に考えていくことが望まれる。

謝 辞

本研究にあたり、ご協力いただき貴重な体験をお話くださいました対象者の方々、C病院の関係者の方々に深く感謝いたします。

文 献

1. Taylor SE, Lichtman RR, Wood JV, et al. Illness-related and treatment-related factor in psychological adjustment to breast cancer. *Cancer* 1985; 55: 2506-2513.
2. 上谷いつ子, 前田えま, 大川祐子ら. 乳房再建患者の心理過程. *臨床看護研究の進歩* 1993; 5: 133-142.
3. 谷口 綾. 一期的乳房再建術を受けた乳がん女性の思いと看護支援. *看護教育* 2004; 45 (8): 660-663.
4. 尾沼奈緒美, 佐藤禮子, 井上智子. 乳がん患者の自己概念の変化に即した看護援助. *日本看護科学会誌* 1999; 19(2): 59-67.
5. 安藤満代, 青木幸昌. 慢性期がん患者の気分と自尊感情, 健康統制観, ソーシャル・サポートとの関係. *がん看護*

- 2001; 6(4): 343-349.
6. 今井みゆき. 乳房切除術を受けた乳がん患者の性に関連する意識. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録 2000; 25: 470-475.
 7. 浅野美知恵, 佐藤禮子. がん手術後5年以上経過の患者とその家族員の社会復帰過程におけるがん罹患の意味. 千葉看護会誌 2002; 8(2): 9-15.
 8. 桜井 厚, 小林多寿子編著. ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門. 東京: せりか書房, 2005: 12.
 9. やまだようこ. ライフストーリー研究 教育研究のメソッドロジー. 東京: 東京大学出版会, 2005: 191-216.
 10. 松木光子監訳. ロイ適応看護モデル序説<原著第2版>. 東京: HBJ 出版局, 1993: 211-215 .
 11. 岡本夏木. 意味の形成と発達—生涯発達心理学序説. 東京: ミネルヴァ書房, 2000; 8.
 12. Schoenberg B, Carr AC. Loss of external organs: limb amputation, mastectomy, and disfiguration. *Psychological management in medical practice* 1970; 119-131.
 13. 小島操子. 看護における危機理論・危機介入. 京都: 金芳堂, 2004: 21.
 14. 小西敏子, 佐藤禮子. 乳がん患者の手術に臨む姿勢とそれに影響を及ぼす要因. 千葉看護会誌 2001; 7(1): 67-73.
 15. Antonio Filiberti, Marcello Tamburini, Luciana Murru, et al. Psychologic effects and esthetic results of breast reconstruction after mastectomy. *Tumori* 1986; 72: 585-588.
 16. 鈴木ひとみ, 江藤由美, 大石ふみ子. 診断から手術までの術前プロセスにおける乳がん患者の心理変化. 三重看護学誌 2008; 10: 47-57.

Changes of Self-Concept in Breast Cancer Survivors and Meaning of Breast Reconstruction

Michiko Sunaga¹ and Tamae Futawatari²

1 Course of Health Sciences, Gunma University Graduate School of Medicine

2 School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Gunma University.

Purpose : To clarify the process of changes in the self-concept encompassing the period between the disease onset and the present and to delve into the meaning of reconstruction in breast cancer survivors who have chosen the two-stage breast reconstruction. **Patients and methods :** The subjects were Ms. A, who underwent the reconstructive procedure after mastectomy; and Ms. B, who selected the same procedure 2 months after breast-conserving surgery. Their mental processes were analyzed by means of a qualitative description based on the life story studies. **Results :** The following themes were extracted from similarities in the changes in self-concept: 1. The patient cannot bear to tell others that she suffers from breast cancer; 2. She oscillates between a complex concerning the loss or deformation of her breast and the importance of preserving her life; 3. She has a certain expectation about breast reconstruction; and 4. Through the breast reconstruction, she acquires a unique approach to life and regains self-confidence. **Conclusion :** Breast reconstruction is an effective means by which the patients body image is heightened and a new value concept as a woman is acquired. This suggests that one must aid these patients when they express the doubts concerning their value concepts and other related thoughts along with the changing process of the self-concept; and offer them necessary information so that the concept of their self-worthiness may be reinforced. (Kitakanto Med J 2008; 58: 377~386)

Key Words : breast cancer survivors, breast reconstruction, self-concept, meaning